

江乃島紀行

註釈

第一日 江戸八丁堀く神奈川宿

鎌倉鶴が岡、江の島詣の事、あまた

としおもひわたたりけれど、何くわと世の

じつわむじげへ、また道の程もやう遠

ければ、心にもまかせむしを、じつ

ばかりは何のさほる事もなくて、卯月

中の八日しのめに生だつ。空のけし

いと静かなり。

ねぎ事の としをかさねて夏衣

けふおもひ立 たびぞすべしき

高輪にてしばし休らふ。東海寺・海安寺

の紅葉、過にし秋見しおもかげなど

しのばれて、青葉しげれるさまも見ま

ほしけれど、行先のいそぐまんに、立も

よらず、さめず・あらいが崎をも打過て、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも

いとやすらかにこえ、川崎の萬年屋と

いへるに立よして、風の支度などいとのへ、

神奈川の井桁屋にやどりぬ。それよ

むかひなる権現山にのぼり、海面はるかに

・じつわむ：行為、仕事。

・げへ：むし

・ねぎ事：祈る事、願う事

・夏衣：夏衣を裁つ
の意から「立つ」などに掛

かる。

・海安寺：海晏寺

・神奈川宿井桁屋のことか

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆづげの
けぶり心ぼそく立ち上り、後
ぞまに見かへれば、田畑もまた一つの気色
なり。や、明日も西にかたづけば元のやぶりに帰る。

・気色：景色

第二日 神奈川へ関へ能見台へ金沢

十九日晴、辰の刻近き頃、此やどりを
立出、台の茶店を過て、浅間の御社に
詣づ。富士の人穴と云へるもめづらし。
程が谷より金沢の道、まがりくくて関と
いへる立場にやすひ、山坂のけはしき
道を過て能見堂にいたりぬ。この所の

・関：横浜市港南区関

景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ
巨勢の金岡が筆を捨てんも、実にこと
わりとおぼゆ。爰にふですての松とて

・ことわり：理

大樹あり。むかし、心越禅師この所に
来り給ひて、もろこしの西湖の八景に
似たりとて、八景の名をぞつけられし
とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆
今に残れり。堂のかたはらに三星といふ
亭あり。そこより法師の出来て、八景の
所々見よとて、遠めがねてふ物かしたり。

・てふ：こと

いねにいたく興をそへて、爰にしばし

休らひ、それより立出て、道すがら君が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひとかや。まがりくへて瀬戸橋の

かたはらなる東屋といへるに至りぬ。今宵の

やどりをこゝに定めて、さて照手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹さし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島の此方にて、汐の干

がたに下り立ち、はまべり其外いろくの

目などひろふに、近きあたりのわらはべ

寄来て、にこやかに手伝ふ様もをかし。

はや夕みち来べしとて、舟人のあわ

たゞしうきとめくに、名残つきざねど

舟にうつしりぬ。彼わらはべ共に菓子など

あたへ、すな取舟に綱ひかせつゝ、ともに

入江へ帰るさの左りの方に、一覽亭

つて、はるかの山の上なるに上がりの見ねび、

まじつにすべれたる所のなま、筆にも詞にも

ふさふさの山々見渡され、浦賀の崎・猿島・

上つ

・上つふさ：上総のいよ

・すな取：漁る

・帰るさ：帰る時、帰る

かけ

えぼし^{島帽子}島・夏しま^島、海づら^面つしき^突田、

ひんがし^東北をのぞめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた^瀬・野嶋・

洲さき^崎・瀬戸を見おろし、又見かへれば、

うち川^内より不二のしら雪^瀬はるかにて、

何にたとへむやうもなし。詠^{よみ}尽せねど

日は不二の嶺^嶺にかくれ、たそがれ^昏近^昏じつて

人々のすすめむれば、この山をおりて、また舟に

棹さし、瀬戸の東屋に帰りぬ。此家の

高^殿どのより遠目^鏡がね^鏡取出て遠近^{なほひぢ}を

見めぐらす内に、日も暮はてぬれば、

燈火^照てらし湯あみ^浴などす。ほどなく網もて

取得^{とろえ}し魚など、望のまんに物^物して持出^{持出}て

たれば、日頃は好まざれど、盃^盃めぐらして

わかへつて^取入^所に^入らぬ。

・高殿：高い建物

・物つて：「いづれ」料

理つて「

第三日

廿日晴、夫々に支度^調と^刻入^刻辰の^刻頃^刻に

このやど^宿りを出で、瀬戸明神^社に詣^詣つ。この

みやしろ^{御社}は頼朝公勸請^社し給ふとかや。

またび^{琵琶}は島弁財天^社の御やし^社ろに詣^詣つ。

此^此こは政子御前の勸請^社なりとぞ。蛇木と

いふ幾木ともなく生^おたたり。夫より金沢^{金沢}

・金沢侯：六浦藩主